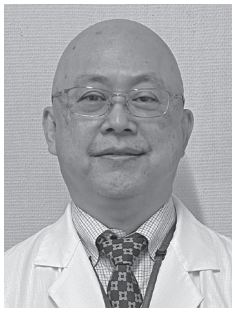
巻頭言

“新薬剤業務”失敗を恐れず チャレンジしてほしい!!



日本病院薬剤師会理事
聖路加国際病院薬剤部長
後藤　一美　Kazumi GOTO

私が薬剤師になって約40年，これまで薬剤師の仕事は時代の要請により大きく変容してきた。調剤における処方監査は，疑義照会をさらに深化させた薬物血中濃度モニタリング（therapeutic drug monitoring：TDM）に関連する投与設計へとステップアップし，薬物治療管理は服薬指導から病棟薬剤業務や外来指導における処方設計や提案へと進化を遂げ，副作用モニタリングとコントロールを実務として定着させた。もちろん，製剤技術の普及進展とともに無菌製剤調製業務も抗がん剤や周術期など多くの業務で拡充が図られた。

そこには必ず職能の開発すなわち教育・人材育成と職能を発揮する仕事つまり業務が一体となって存在し，常に目前の患者にできることを，ひたすらにそして一心に考え取り組んだ薬剤師がいる。働き方など考える余地もなく，やりたいが先に立つ時代であったからこそ実現したこと，それが面白かったからこそ積み上げたことが今に繋がっている。

人の多様な価値観に配慮する現代において「自己決定（力）」が人生において大切な能力の１つであり，人が感じる幸福感に大きく寄与するものと考えている。私は問う若い人たちに，どんな人間になりたいのか，自身がどのようなキャリアを形成したいのか，答えは自分のなかにある。具体的な将来像を熟考し，そこに向かって計画を以て取り組むことを推奨している。

まず自身の思考や能力の特徴を見直し，自身が置かれている環境を分析し自覚するところから始めてもらう。そこから取り組むべき課題やハードルをしっかりと捉え解決に向けた行動を時間軸に沿って計画するよう勧めている。自らの価値観と組織のビジョンや使命に沿った優先順位を確定し実行へと移す，この一連のストーリー（戦略）が人生のロードマップとしてできあがる。

この一人ひとりの取り組みが将来の薬剤師業務を創造していく源となる。自身が学習し成長することで業務プロセスに対する新たな視点や改善の取り組みに繋がる。自らが求める職能発揮こそ医療の質の改善であり医療安全の向上を実現するものとなる。

今，働き方改革に併せて第８次医療計画においても現場でのタスク・シフト/シェアの推進が求められているが，しばしば「薬のことは薬剤師にお願いしたい」と短絡的に要求する医療者が少なからず存在する。薬剤師職能の本質を十分に説明し理解してもらうことが必要であり，薬剤師職能発揮の効果を測定し見える化することも同時に重要となる。人材は無限ではない。どの職種においても貴重な人材であるからこそ，全体最適を原則としてそれぞれの職能理解が求められる。

人口減少に歯止めがかからない本邦では，医療においてさらなる生産性の向上が求められており，医療DXとIT技術の活用による効率化が推進される。生産性向上を測る真の基準は，量ではなく質である。すなわち，医療の質を測り向上させるための薬剤師職能発揮こそが薬剤師の真の仕事，業務だと思う。忘れてならないのは患者のために薬剤師だからできることにこだわり追求し続けること，今ある職能を十分に発揮し将来に繋げる。新薬剤業務の展開には，先人に学び失敗を恐れずにチャレンジしてほしい。